

## 中国武術における散打の変遷過程についての研究

郭 宏志

キーワード：中国武術、散打、中国伝統文化と現代スポーツ

A study on the evolution process of Wushu Sanda in China

Guo Hongzhi

### Abstract

Japanese are unfamiliar with Sanda, a category of Chinese martial arts, but in China, Sanda has long been a type of movement in the form of unarmed confrontation since ancient times. It is Chinese traditional culture which integrates martial virtue, etiquette and tactics. Nowadays, Sanda becomes a 1v1 competition sport on the arena of martial arts.

In this thesis, the author aims to explain the reasons for the change of Sanda from a representative of Chinese traditional and cultural grapple after adding modern sports elements from the perspective of technology and culture. So that the evolution process can be clearer, On this basis the relationship between Chinese martial arts and modern sports can be determined.

Results:

1. Since the reform and opening up policy was implemented in 1979, Sanda has been changed, while martial arts are combined with sports, and pragmatic movements and rules are completed. Namely, Sanda is the product of the combination of traditional martial arts and modern sports.
2. Because Sanda refers to overseas martial arts, it has now become a competition sport emphasizing kicking, fighting, throwing and other techniques of mixed martial arts.
3. In the future, it is necessary to improve traditional clothing of martial arts and value opponents as well as relevant aspects for the sake of development of Sanda.

Key words: Chinese martial arts, Sanda, Chinese traditional culture and modern sports

## I はじめに

中国においては「中国武術」をそのまま「武術」と標記され、中国語発音で「ウーシュー」といい、英文表記は「WUSHU」という。日本では、日本の武術と区別するためか「中国武術」と表記されているのを多く目にする。また、中国の「武術」と「拳法」は同じものとしていわれることがある。中国では、「武術」よりも「拳法」といわれる場合が多い。「武術」は徒手拳法と武器技術を一人や多数で行う伝統文化のひとつである。「拳法」という言葉は、「武術」の特に徒手武術の場合に使われる。本稿では「中国武術」を「武術」として進めていくことにする。

武術の運動形態は、套路（形）と格闘（組手）から形成されている。套路とは、個人での戦いの方法を「形」として表現したものである。まさに、中国人が築いた世界における無形文化財である（周、2010年）。その代表されるものとして長拳、太極拳、八極拳などである。格闘とは、古くは素手で行う武術の技術動作が実戦的な攻防技法で行われている散手・散打、太極拳を実戦とは直接的な関連はなく相手の攻撃に合わせながら反撃する運動形態から形成された「太極推手」がある。この「太極推手」は、芸術性の高いものといわれている。さらに、武器を用いる長兵器、短兵器がある。

この中国の代表的な伝統文化である武術が変容を迎えることとなった。それは1978年に「改革・開放」政策を実施し、社会全体が大きな変革を遂げた、その過程において政府は行政規制の緩和を行いながら、市場の需要によって経済を運営する新たな体制に移行することとなった。その中にあってスポーツも大きな改革が行われた。その結果、武術も以前の隆盛を引き起こすための改革が1979年から開始された。その中のひとつに散打も対象となり、以前の格闘

の散打からボクシング、ムエタイ、レスリングなどと組み合わさったような新しい散打となった。

## II 研究目的

本研究は、中国伝統文化でもある武術としての散打がなぜスポーツ要素の入った新しい散打に変容したのかを、技術や文化的側面から探り、その過程を明らかにすることを目的とした。そのうえで、中国における武術とスポーツの関係について示唆を得ようと考えた。なお、名称の混乱を避けるために1979年以前を「散手」、それ以後を「散打」として進めていくことにする。

## III 研究方法

### 1. 文献調査

中国における武術や散打についての文献及び資料（中国の学会誌・研究論文及び報告書・新聞）を通して事実を把握した。その後、散打の変遷の経緯を探った。

### 2. インタビュー調査

中国の武術における散打の変容について、武術及び散打の指導者からインタビュー調査を実施した。

調査期間：平成29年7月、8月

対象：2大学（瀋陽師範大学、瀋陽体育学院）及び2体育学校（瀋陽市体育学校、日照市体育学校）の武術及び散打授業担当者5名

## IV 結果・考察

### 1. 中国の武術

武術の技の成り立ちでは、原始社会における動物を狩猟することから始まり、それを「搏撃」と呼び、春秋戦国時代には「技撃」といい、漢の時代からは「武芸」という名称を用いる（張、1998年）ようになった。

しかし、これはあくまでも戦いにおける技術としての表記であり、一般的には「技撃」や「武芸」が多く用いられていた。その後、中華民国（1912年）初期から「国術」や「功夫」と称し、中華人民共和国（1949年）からは「武術」と呼ばれる（林、1999年）ようになった。

格闘は徒手と武器この二つ形式がある。徒手の実戦的技法であった散手は、近代から改善され現在はリングの上で1対1の攻防技法を行う散打競技となっている。一方の太極推手は、2人で太極拳を合わせて行い、実戦とは直接的な関連はなく相手の攻撃に合わせながら反撃する運動形態から形成されている。

## 2. 散打の変遷

### 1) 1979年以前の散手

散手とは武術の種類のひとつではなく、2で行う技の練習形式のことであった。その後、明代になり正式な格闘は「打擂台」（笠尾、1994年）と呼ばれる。清朝初期に現れた太極推手は、伝統的基本法則に則った運動形態であり、推手練習の基本となった。中華民国時代以前については、それまでの格闘体系を集大成した太極推手へと変質したのである（竹田ら、2001年）。また、中華民国時代から、武術大会の中に格闘の試合が散手であり、3本勝負（2回勝てば勝ちとなる）の形式で行った。その後、文化大革命により武術は「四旧」として禁止された（楊、2009年）。

### 2) 新しい散打の誕生

中華人民共和国成立（1979年）以後における散打の変遷を以下三つの段階に分けて論じる。

#### (1) 1979年から1989年（試験段階）

1979年から国家体育委員会は、武術という伝統文化遺産を全面的に継承し発

展するため、競技スポーツという観点から、まずは浙江省体育委員会、北京体育学院（現在は北京体育大学）、武漢体育学院3つの施設で、武術の競技種目としての散手、短兵器、長兵器、太極推手の試験的に練習を行い、伝統文化を全面的に押し広めるつもりであった（于、2010年）。

また、国家体育委員会の「積極、穏当、安全で対抗性項目を行う」という方針にしたがって、散手と太極推手の試験段階の地域を拡大した。選手の事故を予防するため、体と太腿だけが有効得点となった。

規則の変更は技術の運用が多くなり、投げ技の使用率が増え、キックとパンチの得点も多く、キックとパンチの実用性も高くなった。

#### (2) 1989年から1999年（発展段階）

散打の発展段階は、国家体育委員会の決定によって1989年から全国規模の「全国武術選手権大会散打団体競技、個人競技」と単独種目の選手権大会に入った（刘、2012年）。散打はこの10年間の試験段階や研究を経て、競技スポーツとして基本的に形成され、武術の散打競技として新しい発展の段階に入った。

#### (3) 1999年から現在（完成段階）

この完成期間は数多くの散打競技大会が開催され、ビジネスやメディアを取り込んだものとなり、伝統文化としての武術からは逸脱したものとなったといえよう。また、発展期間の中頃から完成期間では、映画等でカンフーや少林寺が流行になり、世界に武術の存在を知らしめたが、それは純粋な武術ではなかった。さらに、日本でもK1などの総合格闘技が話題となっていた時代背景があり、関連性が伺える。

表 1 以前の散手と新しい散打の比較

	以前の散手（1929 年から 1979 年）	新しい散打（2017 年）
名称	散手（伝統的なスタイル）	散打（競技的なスタイル）
服装	伝統武術の長服装、靴	防具（頭、歯、手、胸、急所、足）、ショートパンツ、タンクトップ
階級制	なし	公式の大会は 48kg～90kg 以上、11 階級
勝負判定	相手が重傷、死亡、降伏	審判員が判定する（得点）
競技目的	軍事人材と武術人材を選抜する	試合の席次を取る
場所	室外、長さ 20 m、幅 18.6 m、高さ 1.3 m の擂台	室内、長さ 8 m、幅 8 m、高さ 1.3 m の擂台、擂台の端は赤いラインがある
得点基準	不明確であるが、1 点基準がある	1 点、2 点、0 点
試合技術	太極拳、長拳、少林拳、形意拳、八極拳など武術の技術、制限ない	主にキック、パンチ、投げ技など攻防技法、部分技術が使用できない
反則	目、急所、咽喉を当てることが禁止	審判員の警告を無視すること
審判	競技規則は不備であり、具体的な得点基準がない。審判員の役割は試合の秩序を守る	勝負判定の基準があり、審判員の号令と手による表示がある。審判委員会が判定を監督する

### 3) 比較（以前の散手と新しい散打）

表 1 は以前の散手（1929 年から 1979 年）と新しい散打（2017 年）を比較したものである。以前の散手と新しい散打には相違点がある。それは以前の散手は伝統スポーツとして、新しい散打は競技スポーツとして存在していることである。これは、本来の武術が分裂したように見えるが、近代社会の発展情勢に適した道だったかもしれない。事実として、現在の散打も伝統的なスタイルと競技的なスタイルの二種類に分かれている。

つまり、前者は武術の技を自由なスタイルで行っていたものと、後者は現在の武術に西洋体育のキック（足技）、パンチ（打つ技）、投げ技などの攻防技法を交えたスポーツ競技になっている。しかし、散打は、武術の徒手対抗形式の一種であり、中国伝統文化としての武徳やマナー、技の理念、戦術などがある。

### 4) 散打の変容（インタビュー調査から）

武術と散打の先生のインタビュー調査を通じて、散打の成立過程、武術や他の格闘技との関係、これからの将来への発展につ

いて検討を行った。

まず、格闘としての散手は、武術の歴史発展に沿って継承されている。以前の格闘は社会の不安定要素になる可能性があり、政府は格闘の発展についていろいろと制限を行った。文化大革命には、武術は「四旧」として禁止された。専門家は武術を引き続き発展のために、「健康武術」と「実演武術（形）」などを行ってきた。しかし、武術本来の実戦的な質がなくなっている。そのため、実戦形式もできるよう武術専門家は以前の「散手」という形式を革新していった。そこで 1979 年の「改革開放」からスポーツ運動も革新されて、武術の実用的な動作をまとめて、現代のスポーツの形で再結合し、実用性とルールが整備された。つまり、伝統的な武術文化と現代スポーツ精神が繋がって散打が生まれた。

また、散打経験の先生からは、武術選手とキックボクシングなど格闘選手の成績は武術の方がよくないため、武術の専門家と管理当局は検討を行った。その結果、散打は伝統武術からできた武術であるが、海外の格闘技術を参考にして新しい散打が始まった事実があることから、現在の散打は

ボクシング、ムエタイ、キックボクシングなど海外格闘技が似ている結果になった。つまり、キック、パンチ、投げ技など総合的な格闘競技になったものである。

他の武術や格闘技との関係については、ほとんどの先生が散打は伝統武術であり、八極拳の崩拳や詠春拳の日拳などの伝統の拳法からできているという。しかし、散打経験者からは、散打は海外からの影響を受けたものと考えている。散打はテコンドーとレスリングを融合した格闘技のひとつであり、散打と伝統武術の関係はそんなに多くないとの回答を得た。

将来への発展については、すべての先生が、中国の伝統的な武術服を使用して、技術と動作を伝統な武術動作を改良して加える。さらに、礼儀や規範を守り、防具も伝統武術文化のデザインをしたほうがいいとの意見であった。

### 3 武術とスポーツ

#### 1) 武術の定義から

1932年から2009年までの武術の定義について捉えてみた。注目する点は武術を伝統スポーツとみるか、または競技スポーツとみるかである。

最初の定義は民国政府を公布された『国民体育実施計画』であり、これは近代において早く公布された体育政策である。この政策の中に、中国伝統文化としての中国武術が重視されている。定義は防御の技と身体運動の方法の二つのポイントが注目できる。最近の定義は、2009年河南省で行われた国家体育总局武術運動管理センターの「武術定義と武術礼儀について」の会議の中に公布された定義であり、武術の論理的な基礎は中国文化であり、技術の基本内容として套路（形）や格闘さらに攻法は主な運動形式の伝統武術であるとしている。

#### 2) 武術の近代スポーツへの変容

1840年後、中国は西洋の近代体育に影響されて、民族の伝統的な文化は変わらなければいけなかった。そして、政府と武術愛好者は伝統文化を残すために、それぞれの試験的な試みを実施した。

武術は、アヘン戦争（1840年）から中央国術館が成立（1928年3月）まで、伝統文化として民間と軍隊で発展してきた。以後は、西洋体育のシステムを参考にして、国内の武術大会が開催された。

この時期の武術は正統のスポーツにとして提唱されるが、外来スポーツを支持する人もいた。1930年代に最も激しかったこの論争は「土洋体育論争」（李、2015年）であった。「土」は地味的な武術としての伝統スポーツ、「洋」は海外からの近代スポーツである。「土洋体育論争」と武術の関係では、武術は近代スポーツへの転換の啓蒙運動であった。その後、武術の発展に大きな影響を与えた。

国内戦争後、新中国成立して、経済と農業は重要な発展政策であり、武術などの健康運動はあまり重視しなく、武術はゆっくりと発展していった。中国は1978年に「改革・開放」政策を実施し、社会全体が大きな変容を遂げた。その過程において政府は行政規制の緩和をしながら、市場の需要によって経済を運営する新たな体制に移行することとなった。その中にあったスポーツも大きな改革が行われた。その影響を受け再び武術のブームを起こすための改革が1979年から開始された。

武術は套路と散打の二つが対象となり、套路は武術技術の基礎であり、競技では選手が完成した套路動作の優劣で採点をし、パフォーマンスと健康運動を一番の目的としたスポーツである。散打では、以前の格闘の散打からボクシング、ムエタイ、レスリングなどと組み合わせさせたような、相手

を攻撃して点を得るための、新しい散打となっていた。

この武術とスポーツの関係は、日本においても行われている。第二次世界大戦の戦前までは、日本の武道が伝統武道として、学校教育を中心に行われていた。それが戦争の局面で軍隊の訓練として使用されていた。それが1945年8月15終戦後、武道は軍国主義を助長したとして武道は禁止され、武道という用語も使用できなくなった。空白の期間ののち1950年代から学校で柔道、弓道、剣道（しなない競技）はスポーツとして行うことが許された。そして、それらの名称を「格技」とされたが1989年に「格技」から新しい「武道」という名称になった（齋藤、2014年）。

しかし、柔道や剣道はスポーツの中のひとつの種目に形式的にはなっているが、伝統武道としては生きていることは事実である。中国においてもスポーツ化した武術であるがその中身が大切であり、伝統文化は是非、残すものである。今後、中国における武術とスポーツの関係を捉えるときに重要な参考となるであろう。

以上、武術が近代化の過程で抱えている共通の問題についてまとめ、その問題を「競技スポーツ」と「伝統スポーツ」の視点から捉えてみた。

すでにスポーツ化している武術の普及の方向を探っている現在、日本の柔道や剣道に共通して直面する問題は、伝統スポーツとして内包している民族文化性が世界の諸民族にグローバル化する際に生じる文化との衝突がある。

## V 結語

本研究の目的は、中国伝統文化でもある武術の格闘としての散打がなぜスポーツ要素の入った新しい散打に変容したのかを、技術や文化的側面から探り、その過程を明

らかにすることであった。そのうえで、中国における武術とスポーツの関係について示唆を得ようと考えた。

格闘としての散手は、1979年の「改革開放」からスポーツ運動も革新されて、武術の実用的な動作をまとめて、現代のスポーツの形で再結合し、実用性とルールが整備された。つまり、伝統的な武術文化と現代スポーツ精神が繋がって散打が生まれた。さらに、より強さを求め海外の格闘技術とシステムを参考にキック、パンチ、投げ技など総合的な格闘競技になったものである。したがって、ボクシング、ムエタイ、キックボクシングなどに似ている結果になった。

しかし、中国における武術としての散打の文化的発展のためには、競技力向上だけを主とする目的だけではなく、散打のもつ伝統性や精神性を兼ねそなえたものとして普及・発展すべきある。また、今後は中国の伝統的な武術服を着装するとか、対人的な形を重視するなどの武術動作を改良して加える必要がある。

## 参考文献

- 黄正嵐（2010年）『民国体育法規研究』蘇州大学
- 笠尾恭二（1994年）『中国武術史大観』福昌堂出版
- 国家体育委員会武術研究院（1996年）『中国武術史』人民体育出版社
- 周争蔚（2010年）『散打教学与訓練』人民体育出版社
- 徐元民（2000年）『中央国術館発揚本土体育之歴史経験』行政院国家科学委員会專題研究計画成果報告
- 曾恒辉（2004年）『武術散打的現象及可持續發展的思考』广州体育学院学報
- 竹田隆一、陳民盛、黒須憲、齋藤浩二（2001年）『中国における古代武術の成立に関

- する研究』山形大學紀要
- 中国体育総局（1961年）『武術』
- 中国体育総局（1978年）『武術』
- 中国体育総局（1983年）『武術』
- 中国体育総局（1988年）『武術』
- 中国体育総局武術運動管理センター（2009年）『武術定義会議報告』
- 中国武術協会（1982年）『散打競技規則（仮）』人民体育出版社
- 中国武術協会（1990年）『散打競技規則』人民体育出版社
- 中国武術協会（2000年）『散打競技規則』人民体育出版社
- 中国武術協会（2003年）『中国武術教案』人民体育出版社
- 中国武術協会（2013年）『散打競技規則』人民体育出版社
- 中国武術協会（2017年）『散打競技規則』人民体育出版社
- 丁守偉（2012年）『中国伝統武術轉換的研究』陝西師範大学
- 張山（1998年）『中国武術大百科全書』中国大百科出版社
- 張成忠（2001年）『中国武術「長拳」の特徴と変遷』武道学研究
- 張耀庭（1997年）『中国武術史』人民体育出版社
- 毛景广（2006年）『体育鍛鍊与欣赏：武術・柔道・摔跤・散打』郑州大学出版社
- 楊祥全（2009年）『中華人民共和国武術史』台北逸文武術文化有限公司
- 李義君（2015年）『「土洋体育論争」的回顧和啓示』体育学刊
- 林輝鋒（2014年）『中央国術叙述』文史周刊
- 林伯原（1996年）『中国武術史』台北五洲出版社
- 林伯原（1999年）『近代中国における武術の発展』不愛堂出版
- 于万岭（2010年）『散打発展論』体育文化
- 导刊
- 姜伝銀（2010年）『中国武術散打の発展過程以及対策』上海体育学院学報
- 姜伝銀（2012年）『武術散打新規則对散打比赛导向效应的研究』成都体育学院学報
- 尹洪兰（2013年）『民国時期重要武術比赛総述』体育文化导刊
- 齋藤浩二（2014年）『武道の必修化に伴う体育実技（剣道）指導』仙台大学体育学部現代武道学科教育研究会
- 龍玉森（1996年）『中央国術館史』黄山書出版
- 刘勇（2012年）『我国武術文化国際伝播現狀与発展策略研究』湖南師範大学
- 楊祥全（2005年）『散打発展融合論』搏击・武術科学